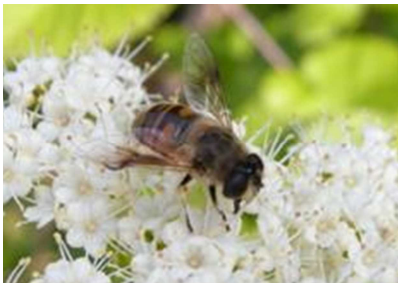
化ける

1. ハナアブ

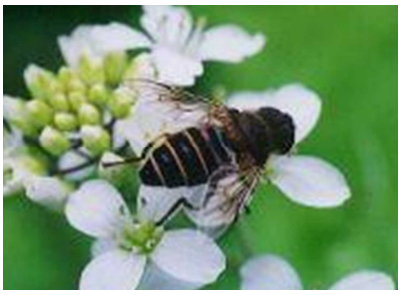
一瞬ハチかとおもわせる黄色と黒色の縞模様をもったずんぐり体型が花に来ています。黄色と黒色の縞は、警戒色と呼ばれるトラロープでおなじみの組み合わせです。花でよく見られるアブなので、ハナアブと呼ばれています。ナミハナアブ、シマハナアブ、アシブトハナアブと、大きさは同じで、胸部、腹部背面の模様が少し違う種類があり、普通にであいます。



ナミハナアブ

アシブトハナアブ

ハチと異なる点は、ハチは翅が4枚、ハナアブは2枚ですからすぐわかります。アブとついていますが、ハエの仲間です。スズメバチ類に似せていることは、身を守る手段に使っているとおもわれます。



シマハナアブ

成虫の食べ物が蜜や花粉なので花によく来るのですが、体を覆う毛に花粉を付けることになり、植物にとっては花粉の運び屋として重要な位置を占めています。植物の開花時期と、その植物に特定した昆虫送粉者の羽化時期は一致しているのですが、気候の温暖化でずれが生じて、植物の絶滅が心配されています。この点、ハナアブは年に何回も成虫が羽化し、年中見られるため気候変動等にも対応できます。自然界のみならず、農業にとっても重要な昆虫となりそうです。

2. テイカカズラ

藤原定家が、愛した女性を死後も忘れられず、葛になって彼女の墓に絡みついたという伝説に基づいて命名されたというだけあって、絡み付いた木が見えないくらいたくさんのつるが取り巻いてしまいます。6月の開花期には全体が白くなり、遠望すると白い樹冠の大木があるようにみえます。地面のたくさんの落花でも上にあることがわかります。

テイカカズラの落花

樹木の幹に気根で固着して上に昇るつるは直径数cmにもなります。多数の気根の痕が残り、触ると怪我をするほどです。地面を這っているうちは、葉も全く別種の植物のようで開花もしませんが、樹冠に出て光を得ると急速に葉も大きく厚くなり、樹幹から離れて空間につるを伸ばし、開花します。

テイカカズラの花

花は筒の先が5裂して広がり、ねじれがあるためスクリューのようになります。キョウチクトウの仲間で、花には芳香がありますが、傷つけた時に出る白い汁は有毒ですので、触ったり、口に入れないようにしましょう。

（倉吉博物館専門委員　國本洸紀 2014）